

聖書：コリント人への手紙第一 8：7～13

説教題：兄弟をつまずかせないために

日時：2022年7月17日（朝拝）

前回の8章1節から新しいテーマに話が移っています。今回のテーマは1節に述べられた通り、「偶像にささげた肉」についてです。1節に「私たちはみな知識を持っている」というコリント人たちの言葉が引用されていますように、コリント人たちは、このことについて自分たちは知識を持っていると誇っていたようです。その知識の内容については4節に記されました。すなわち「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」というものです。この知識に基づいてコリント人たちは偶像にささげた肉を食べても問題ないという立場を取っていました。もう少し具体的にこれはどういう状況についての話なのかが今日の10節からはっきり分かります。それは「偶像の宮で食事をする」ということです。当時の異教社会では様々な公的な会合は異教の神々を祭る神殿や偶像礼拝が行われる場所が会場となっていました。そこではまず異教の神々へのいけにえがささげられ、その後で偶像に献げた肉が参加者に振る舞われました。このような状況でクリスチャンはそれを食べて良いのかどうかという問いが当然コリント教会の中に生じたわけです。教会の中の「我々は知識を持っている」と誇る、言うならば知識派の人々は問題ないと考えました。「偶像礼拝が行われ、偶像に肉がささげられたと言っても、偶像は実際には存在しないのだから、その存在しないものが何か影響を与えることはできない。だからその食事会に出席し、それを食べても何の問題もない。神はただお一人であって、世の偶像の神は実際にはないという知識にしっかり立てば、迷信的な恐れを持つ必要はない。他の人々もまずこの知識にしっかり立つべきである！」とその人々は主張していました。一方、教会の中の他の人々は、そうではないと考えました。彼らの多くはそれまでの異教信仰、異教習慣から抜け出して、まことの神を礼拝するようになった人々です。その彼らにとって偶像の宮へ行き、偶像に献げた肉を食べることは以前の生活に逆戻りすることのように思われました。こうして教会の中に意見の相違また分裂状態が生じていたわけです。そんな中、自分たちの知識は正しいと確信する人々はあくまでその路線を強力に推し進めようとしていたようです。後で見ますが、彼らは偶像の宮へ行って人々の見ている手前、あえてそれを食することをしていた。しかしそういう態度は害をもたらすということをパウロは今日の箇所ですべて語って行きます。

まず7節に「しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません」とあります。1節に「私たちはみな知識を持っている」というあるコリント人たちの主張が記されましたが、パウロはそうでない人々もいることに目を留めさせます。そして知識を持っていると主張する人たちが強力に自分たちが確信することを推し進めると、どうということになるかがここに記されます。それは食べるべきではないと考えている人も食べるように仕向けられるということです。その人たちはどういう状態でその肉を食べるのでしょうか。ここに「偶像に献げられた肉として食べる」とあります。いわゆる知識派の人々の姿に倣って、その人々は偶像の宮での食事会にあずかるわけですが、その人々は自分たちは偶像礼拝を行っていると感じながら、その肉を食べるのです。「偶像に献げられた肉として食べる」とはそういう意味です。なぜそうかと言えば、彼らは今まで偶像になじんで来たからです。そのような異教習慣の中に長く生きて来たからです。ある人々が偶像の神はないのだからと説得しても、同じレベルで理解しているわけではありません。その結果、その弱い良心が汚されてしまいます。弱い良心とは、その人々はしっかりした判断尺度を持っていないということです。人の言われることに左右されやすい心の状態のことです。信仰に入ってまだ日が浅いということもあるのでしょうか。確固とした自分の意見や判断を持つだけの力がまだありません。その人々が形だけ知識派の人々の言うことに従うとどうなるか。彼らは偶像礼拝をしているような気持ちになるのです。つまりその良心が汚されるのです。これは本当は良くないことではないか。神の前に良くないことを私はしているのではないかと感じる。そうした状況を経て、さらなる害がその人に及ぶことになると後に言われます。

パウロは8節で言います。「しかし、私たちを神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。」さてこれはどういう意味でしょう。簡単に言えば食物は神の前に重要ではないということです。食べても食べなくても問題ではない。そういうことを言っているということは分かります。ではこのパウロの言葉は、二つのグループの内、どちらに味方するものでしょうか。一見、食べ物に神の前に大きな意味を持たないから、食べても問題はない。気にせず食べるが良いと言っているようにも見えます。ところがこの節後半の言葉を良く考えると、その意図しているところは逆であることが分かります。「食べなくても損にならない」というのは、つまり食べなくても良いということです。その次の「食べても得になりません」も、同様に食べなくても良いという意味です。つまりパウロは食べるべきだ！と強く主張する人々のプレッシャーがある中で、食べなくてもいい！と

言っているわけです。これは食べるべきだとする知識派の人々への反対論と言えます。知識派の人々は、偶像にささげた肉も恐れず食べるべきだと考えていました。迷って食べようとしない人々は知識の足りない弱い人々、不安定な人々である。そうではなく、確信をもって食べる人こそ正しい知識を持つ人であり、そういう者たちこそ神の前にしっかり立つことができる立派な信仰者だと考えていた。そう思っている彼らにパウロは、そうではない！と言っているわけです。私たちが神の御前に立たせるのは食物ではない。だからそれを食べなくても良い。食べなければならないと考える必要はないということです。

そして9節で「ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい」と言います。ここに私たちは何を大事にして生きるべきであるかが教えられています。私たちの心を占めるべきは自分の権利とか、自分の主張を通すこととか、自分の知識を示すことであってはならない。それよりも関心を注ぐべきは、その自分の言動が弱い人々のつまずきとならないようにということです。つまずきとは、つまずいても先へ進めなくなること、信仰の道から脱落すること、神の民としての歩みをストップしてしまうこと、そこから離れてしまうことを指します。ですから自分の言動が他の兄弟姉妹に与える影響を良く考えなければならないということです。ここで特に「弱い人たちの」と言われていることにも良く注目すべきであると思います。彼らが落ちて行くのはその信仰が弱くて知識が足りないからだ！などと軽んじてはならない。彼らがつまづくのは彼らの側に問題があるからだなどと言いついてはならない。むしろ弱い人々をつまずかせないように。このことをあなたがたの心に留めるべき大切な指針としなさいと言われています。

10節以降でさらに具体的に語られます。そこに「偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら」とあります。ここから今論じられているのは市場で売られた肉のことではないことが分かります。後にその話も出て来ますが、今ここで問題になっているのは異教の神殿で偶像に献げた肉を食することです。ここで「知識のあるあなたが」そうしているのを「だれかが見たら」とあります。これはその肉を食べて良いのだと主張する人々と、そうではないとする立場の両方の人が同じ会場にいることを暗示します。それは様々な事情でどちらの人もその場所にいることが必要な状況があったのか、あるいは知識派の人々が、そうでない人々を促して、そういう場に連れて行ったということだったのかもしれませんが。そこで知識のある人々は自分の確信に立って、

そこで供される肉を食べるわけです。率先して、このようにするのが正しい信仰者のやり方だ！と示すわけです。10 節の「それに後押しされて」という言葉は、前にも出て来た「家を建てる」という意味の言葉です。ここには知識派の人々による、そうではない人々を教育してやろうとする意図があったことを暗示するのではないかと注解者たちは言います。彼らを建て上げてあげよう、成長させてあげよう。そのように考えて自ら進んで肉を食って見せる。知識のある成長したクリスチャンはこうするんだ！と見せつける。すると結果はどうなるでしょうか。弱い人たちは、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようになるのです。知識派の人々が、そうすることは問題ないと言っているため——実はその理解には問題があるということが後に 10 章で言われますが——弱い人たちもついには同じように行動する。そしてそのことによって彼らの良心は汚されるのです。やはりこれは偶像礼拝ではないのか。これは神の前に罪を犯していることではないのか。そうして神と自分の関係についてやがて悩むようになり、ついには信仰から脱落することへとつながる。11 節に「つまり、その弱い人は、・・滅びることになります」と言われます。あなたの知識によって！です。知識をただ振り回す時、こういう恐ろしいことが起こるといことです。相手を建て上げるどころか、取り返しのつかない霊的な害を相手にもたらす。その相手はキリストがその救いのために尊い命を投げ出してくださった人です。そのキリストにとって大切な人を、あなたがあなたの誇る知識によって滅ぼしてしまう。ですから 12 節で「あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです」と言われます。これは単なる人間への罪では済みません。それはキリストに対する罪だと言われます。

最後 13 節でパウロは自分のスタンスについて証しします。「ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。」 これまで偶像の宮で食事することを話題として来ましたから、ここも兄弟をつまずかせるのなら私は偶像の宮で肉を食べません！となってもおかしくないところです。しかしパウロは後で明らかになりますように、偶像の宮で食事することは悪霊と交わることだと言います。ですから彼が偶像の宮で肉を食べるとい状況が発生するはずはありません。パウロはそれ以上のことをここで言っています。彼はもし兄弟をつまずかせるなら、私は一切肉を食べないと言っています。偶像に献げた肉ではなく、肉全般です。ここに自分の権利、自分のして良いこと、自分の自由に属することも兄弟の益のためには喜んで放棄するというパウロの姿勢が示されています。

す。もちろん「兄弟をつまずかせるのなら」という条件が付いていますから、そうでない状況ではパウロも肉を食べることはあったと思います。しかし彼はこのようにして、いつでも他者の益のためには進んで自らの権利を放棄する用意のあることを明言します。これはこの後の9章の内容につながって行きます。彼は9章でもっとすごいことを語ります。人々の益のためには、当然要求できる自分の権利を放棄して生きているという生き方を証しします。そこにクリスチャンのあるべきあり方をパウロは身をもって示して行くのです。

以上の箇所を通して私たちは何を思うでしょうか。私たちもそれぞれ自分が確信していること、自分が良いと思っていること、自分の持論とするところがあるかと思えます。しかしそれを強く主張し、前面に出す結果、弱い兄弟を滅ぼすかもしれないということを良く考えに入れておかなければならないことを思われます。色々な状況にある方々がいます。そんな中、私は正しいことをやっているんだから良いのだ！とは言えない。周りの人がどう取るかは周りの人の問題であって、私の知ったことではないなどとは言えない。その私の言動は周りの兄弟姉妹にどのような影響を与えるかについて敏感でなければならぬと言われていました。もしそれで周りの人々をつまずかせ、滅ぼすなら、それはキリストご自身に対して罪を犯すことであると言われています。

パウロは13節で「食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、・・・私は今後、決して肉を食べません」と言いました。もし彼が肉が好物だったら、これは大変な犠牲を払う言葉であったと思います。しかし「好物だから、こう言うのはやめておこうか」と考える、というような話ではないと思います。彼はどんなことでも、これだけは手放したくないと思うことが仮にあったとしても、兄弟の益のためには喜んでそれを放棄するということをここで言っています。この言葉を読んで私たちが思うのは、この背後にイエス・キリストがおられるということではないでしょうか。キリストこそ私たちのためにあらゆる権利を放棄して、ご自身をささげてくださいったお方です。ピリピ人への手紙2章6～8節にありますように、キリストは神としてのあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、私たち人間と同じようになり、ついには私たちの救いのために十字架の死にまで進んでくださいました。そのキリストの愛と救いに心から感謝している者として、パウロは喜んでその姿に倣う歩みへ進んでいたということでしょう。

私たちもまず自分の主張、まず自分の言いたいこと、まず自分を持ち上げることで心を一杯にするのではなく、どうすることが周りの方々を助けることになるのか、その祝福に仕えることができるのか、建て上げることができるのか、その関心の下で、自分のすべての行動を律する者へ導かれたいと思います。特に弱い人々のことを大切にしようとして今日の箇所は語っています。イエス様は小さい者、弱い者の一人を大事にされました。マタイの福音書 18 章 10 節でイエス様はこう言われました。「あなたがたは、この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい。あなたがたに言いますが、天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。」 また 14 節でこう言われました。「このように、この小さい者たちの一人が減びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。」 このような小さい者を大切にしてくださいるイエス様の愛のまなざしの下で、今日このように生かされている私たち一人一人です。そのことを感謝して、そのイエス様を映し出すような一人一人の歩みへと、そうして周りの方々を建て上げるために用いていただき、神に栄光を帰す主の民一人一人の歩みへと、導かれて行きたいと思います。